

相撲ニニ知識 (八十二)

林 勤

相撲協会八十年を振り返る
五、昭和三十六年〜四十年

※相撲史には際立った三つの黄金時代がある。一つは、戦前昭和十一年〜十八年の双葉山時代、二つ目は戦後、昭和三十年代の栃錦・若乃花の栃若時代、今一つは昭和三十年代後半〜四十年代前半の柏戸・大鵬中心の柏鵬時代である。今回述べる昭和三十六年〜四十年の間は栃若時代が終り、白鵬時代に入る「相撲黄金時代」である。

昭和三十六年

○十一月、大鵬、柏戸同時横綱昇進。

大鵬二十一歳三ヶ月、当時史上最年少横綱、柏戸二十二歳九ヶ月。

昭和三十七年

○五月、栃若時代を築いた「土俵の鬼」四十五代横綱若乃花引退、二子山親方襲名(二代目若乃花、隆ノ里の二横綱、実弟貴ノ花、若島津の二大関ら)を育てる。

○五月、四十六代横綱朝潮も引退。

昭和三十八年

○五月、大鵬、史上初の六連覇達成(昭和三十七年七、九、十一月、三十八年一、三、五月場所)。
○九月、大鵬、柏戸が十四戦全勝で千秋楽対決。柏戸勝つて二度目の優勝。

俳句

一月五日 土曜

潮江天満宮

莊嚴の隨身門や淑気満つ
社格あり枯れ梅林もその一つ

合田 青幹

勝男木の真澄の空や初雀

寒禽や末社に在す神あまた

吉本 伸秋

祓戸に木杵が三つ初詣

五日まだ人の流れの宮居かな

中内英明

昭和三十九年

○一月、この場所十四日目、大鵬―栃ノ海戦にかかった懸賞は今までの最高二十六本であった。大鵬の勝。当時の賞金は一本一万円であった。因みに現在は六万円(諸経費五千円が差引かれ、手取りは五万五千円である)。

○二月、ハワイ、米本土巡業。この巡業で見出された「高見山」入門。

*昭和三十六年〜四十年

○この五年の間に昭和三十六年七月・北葉山(大関)、三十七年七月・栃光(大関)、三十八年三月・豊山(東京農大出身)昭和三十五年学生横綱、三十六年三月入門、大関、三十九年三月・栃ノ海(三十九代横綱)、四十年三月・佐田の山(四十代横綱)らが次々に大関、横綱となつて大鵬、柏戸に迫り、優勝を競い、好勝負を展開し、相撲界を盛り上げた。(が、誰も柏鵬には今一步及ばなかった)。

昭和四十年

○一月、部屋別給当り制実施。今までの一門(系統)別給当り制では見られなかった好取組が多くなり好評を博した。

○五月、初代若乃花の実弟・花田(のちの大関貴ノ花)入門。

○七月末〜八月、ソ連公演(初の共産圏公演)。

一枝の殊に揺れをり笹子鳴く
葉牡丹の渦のめだき社頭かな

小笠原 さちを

ねんじりなでうし
懇ろに撫牛撫づる初社

鏡餅の入り来るめでたさよ

中内 みち代

川柳俳句

花蘇鉄抄 ①

小澤 幸泉

老人に医者はいらない

カネは出せ

おにぎりが食べたい

遺書はたった一言

高退教富良野スキーツアーすきい

島本 聡

旭山動物園に到着するや、腰が痛い、足が痺った、肩が重いとつぶやいていた我がシニア軍団は、真つ先にペンギンの行進が見学できるというペンギン行進ロードまで先を争って駆け下りてゆく。南極映像などで観る何100羽もの集団がよちよちと歩いて行く姿を想像しながら待つこと20分。なんと出てきたペンギンは10羽余り、「ペンギンの自由参加で今日はこの程度で行進になります」との説明だが、飼っているペンギンはあわせても30羽はいないだろう。ペンギンをみる人垣の人数は数百人だ。これなら我が家の土佐ジロー群の方がずっと迫力があるのだが。

筒の中を回転するアザラシ、よだれがかかりそうな近くにいるライオン、動き回る北極ぐま。ごく平凡な動物をうまく展示することで成り立っている小規模の動物園である。野市の動物園も、工夫次第で人を集めることができはしないだろうか。

翌朝六時一番のりで食堂に入り、腹一杯の食事。食堂の前の大型ビデオで滑りを繰り返し研究した後、1年ぶりにスキートの板をばく、日本最速という、101人乗りロープウェイにて山頂付近に運んでもらう。初めてのコース、わがシニア軍団若手3番手の乃婦先生を先頭に全員少し離れた別ゲレンデの下に位置する富良野プリンスホテルに到着。限定メニューだが無料の昼食をすませる。何となくもうけた気持ち、チラシをみても、「今日はブルーチップが3倍や、今日は、チュッシュペーパーが安い、景品にジャガイモ詰め放題がある」と。とかいていらぬ買い物をしてくる*

*の気持ちにはこんなものか。午後から降雪が激しくなる。降り積もる雪景色を楽しみながら。1日目は早々に切り上げ大衆風呂へ。サウナの中で外人と話す? where? オーストリア? シドニー、滞在何日? セブン? 単語の羅列と手振り、指の数で話は進んで行く。これを裸の国際交流だ。

終日スキー最終日、山頂付近へ全員集合。ダイヤモンドダストといわれる小さな氷の結晶が、キラキラ光る中で、今や有名カメラマンである忠直先生のカメラでパチリ。気分はジニア。

「あれ追いつかない? どうしてだ」長年何十回も一緒に滑ってきた橋田先生において行かれる。腰痛のせい、首が回らなくなったためか、すきーのワックスのせい、いや違う、晃一先生のすべりがちがうのである。「わしはもう上手になろうなんておもわん。」が秘かに練習し滑りを変えているのだ。6? オでも上手になるのか。がぜんファイトが湧いてきた。添乗員を交えての最後の晚餐。バイキングで食べ放題にしては、皆様小食。野菜ばかり食べるひと、いつものお寿司、うめぼし、焼き魚ですませるひとなど。いやしい私は3分の1になった胃に、カニやエビ、牛肉を我慢できるがかぎり詰めむ。中国産の餃子に、農薬が入っていたとの報道に、わがシニア軍団は、終戦後の食料難を思い出して、話は弾む。「主食の白米は手に入らず、いも、麦ばかりであったこと。いなごを食べたこと。肉といえなくじらであったこと。年に数回の卵ごはんの美味しかったこと。」。輸入食品は買えない。軍隊も買えない。原油が高くなるなら買わなければいい。目玉がうつるようなみそ汁をすすり。野草を食べ、まきで暖をとった経験のあるわがシニア軍団は微動だにしない。

ホテル出発までに二時間ある。がぜん滑ることに情熱がわいてきた私は、朝一番のりで山頂に立っている。氷点下15度だが寒くはない。貸し切り状態のゲレンデを滑降の選手になったような気分、滑り降りる。レールのように二本のシュプールがくつきりといく。このまま極楽へ。。

千歳空港で、何度挑戦してもチュッシュペーパーしか当たらないくじ運の悪さを嘆いたのち、午後八時に無事龍馬空港着。全員元気にまた来年と、再会を誓って解散。原先生来年もよろしく。私の今回の忘れ物は帽子とホッケ三匹のみ。同じ価値観をもつ仲間とのツアーは本当に楽しい。